

富永神社祭礼奉納

とき 平成十二年十月六日(金)
午後四時四十五分始
ところ 富永神社 能楽殿

能

組

仕舞

小 王 母 督
西 王 母
草 子 洗 小 町
湯 子 洗 小 町
葛 湯 子 洗 小 町
城 谷

平 野 瑞 季
島 尚 大 郎
佐 野 仁 美
平 野 阿 裕 美
島 考 三 郎

狂言

口真似

太郎冠者

山本隆平

主 牧 野 貴 明
客 渡 辺 久 詩
後見 畑 中 良 雄

仕舞

老 王 母 松

今 泉 尚 美
今 泉 友 美

仕舞

高 桜 川 砂
鱗 形

鳥 居 久 仁 子
今 泉 孝 子
谷 野 允 千 帆

狂言

鬼瓦

大名

安形忠久

太郎冠者 加藤賢一
後見 佐野元之助

舞囃子

大江山 中嶋

薰 清水 利高

大鼓 清水 利高
小鼓 永田 聡子
笛 加藤 貢

独調

東北

長田郷

塩瀬民子

連管

早笛・舞働

加藤 貢
太田 研 司
今泉 三 規
酒井 淑 規

(休 憩 四十分)

能

羽衣

シテ

中嶋康夫

霞留

ウチテ

竹内三郎

大鼓 清水 利高
小鼓 福井 啓次郎

大鼓 清水 利高
大鼓 今泉 崇史
大鼓 今泉 崇史

後見 鈴木 肇

地謡

竹内省吾 森田 收
田中洋二 高林 坤二
加藤 貢 高林 白牛二
太田 康 弘

1:45分頃

5:00分頃

5:23分頃

5:40分頃

6:10分頃

7:00分頃

7:50分頃

狂言

膏藥煉

都畑中良雄

鎌倉天野雅夫
後見佐野元之助

8:15分頃

仕舞

通籠笠
小太之
町鼓段

本岩佐
田崎野
洋葉菊
子子代

8:35分頃

狂言

仁王

仁王山口俊一

教手水谷至男
立衆佐野元之助
" " " " 山本野勝
" " " " 大原正巳
病人小酒權田原重宏
後見加藤賢一

9:05分頃

能

猩々シテ森田收

ワキ牧野

修

大鼓河村
小鼓福井

総一郎
啓次郎
太鼓鈴木崇史
苗酒井淑規

後見鈴木

肇

地誌

太田研三 太田康弘
今泉英吾 高林白牛
清水利高 高林白牛
加藤貢 田中洋二

(終了予定九時四十分頃)

主催本町区

あ
ら
す
じ

狂言
口真似くちまね

知人から酒肴を貰った主人、程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。
ところが連れて来たのは評判の酒乱の男で、一盃飲んでは一寸抜き、二盃飲んでは一尺抜き、後には
するりと抜いて酔狂する者です。
一計を案じた主人は、太郎冠者に自分の言う様にする様にせよと言いつけまします。

狂言
鬼瓦おにかわら

長々在京した遠国の大名が、訴訟も無事すみ、帰ることになり太郎冠者を連れて日頃信仰する因幡堂
の薬師へお礼とお別れに参詣する。この薬師を国許へ勧請するため堂の造作を詳しくみて回るが、屋
根の上の鬼瓦が目にとまり、国に残した妻を思いだして泣きはじめる。
太郎冠者が間もなく帰国すればお会いになれると慰めると……

能
羽衣はころも

三保の松原ののどかな春の朝、漁師の白竜が浜辺に出て見ると、近くの松の枝に見馴れぬ衣が掛かっ
ている。珍しく思い家宝にしようと持ち帰ろうとします。

その時どこからともなく美しい乙女が現われて、それは天人の羽衣といって人間に与えるものではな
いから返して欲しいと頼みます。白竜はそれを聞いて返すどころか国の宝にするのだと断ります。
天人は羽衣がなければ天に帰ることが出来ないので嘆き悲しみます。さすがの白竜も憐れみ羽衣を返
す代わりに天人の舞樂を奏して欲しいと条件を出しますが、ただ返してしまえば舞を舞わずに空にか
け昇るのではないかと、不信の念を洩らすと「いや疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と天人
にいわれ今更のように心の醜さを恥じます。

天人は羽衣を身につけて、天上の月宮殿の有様をうたい三保の松原の景色をたたえ、君が代の万代を
寿いだりしながらこの世ならぬ舞を舞いつづけ、やがて羽衣の裳裾をなびかせながら霞にまぎれて天
に昇ってしまいます。

あとは、おだやかな波が岸に打ち寄せているばかりでした。

狂言
膏藥煉こうやくねり

膏藥煉の名人を自認している鎌倉の膏藥煉と都の膏藥煉が出会う。

まず二人は、自分の膏藥の系図を自慢しあう。つぎに薬種を比べあい、最後は吸い比べになり、お互
いに膏藥を鼻につけて吸いあうが勝敗の結果は……

狂言
仁王

賭事で財産を無くした男が、日頃から目をかけて下さった方へ暇ごいに行く。
友人はふびんに思い、仁王になりすまして参詣人から賽物をだましとる計画をもちかける。
最初はうまく事が運んで賽物も多い。味をしめた仁王役の男は残ってつぎの参詣人を待つが……

能

狸々

中国のカネキンザンの麓に、高風という大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは揚子の市に出て酒を売ると、富貴の身になるといのです。その夢のお告げの通りすると、なるほど次第に金持となりました。ところで、市のたつごと高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変わらないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む狸々だとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽の江のほとりに出、酒壺を置き、狸々の出てくるのを待つことにします。(ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります) やがて狸々は、薬の水とも菟の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音をかなで、波の音は鼓の調べのようにひびきまです。この天然の音楽にのって、狸々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。